熊取町埋蔵文化財調査報告 第23集

熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅸ

1995年 3月

熊取町教育委員会

はしがき

地球を取り巻く環境が常に変化してゆくなかでよりよい暮らしを目指し努力を続けた結果、多種多様にわたる生活様式が繰り広げられました。それらは文化遺産となって残り、それらを様々な角度から追究することによって過去の様子を知ることができるのです。

その中でも埋蔵文化財とは、発掘調査によって土の中から掘り出されるものですが、古文書に記載される様な一部の階層の人々だけでなく、今に伝わることなく歴史の中に埋もれていった名前も知れない人々の生活にまでも直接触れることのできる遺産であります。これを保存・究明することは、物質的な側面にこだわりがちな現代の私達に対して精神的な豊さや生活への再考をもたらすものであると思っています。

しかしながらこの埋蔵文化財は近年の急速な土地開発等により全国的な規模で破壊・消滅の危機にあります。本町におきましても現在38ヶ所の埋蔵文化財の包蔵地、いわゆる遺跡が確認されていますが、年々その破壊と消滅を止めることはできません。

このような状勢の中で、本町教育委員会では壊されてゆく遺跡の記録・保存を行うために、土地所有者をはじめ関係者各位のご理解とご協力を得て発掘調査等を実施してまいりました。本書は平成6年度中に国庫補助を受けて実施した発掘調査成果を概要報告書としてまとめたものであります。いずれも小規模な調査で十分な成果を挙げたとはいえませんが、皆様のお役に立てていただければ幸いであります。

現地での発掘調査にあたってご理解とご協力をいただきました土地所有者ならびに関係者各位に厚くお礼申し上げますとともに、より一層のご理解・ご協力をお願い申し上げます。

平成7年3月

熊取町教育委員会

教育長　七里　弘

例　　言

1．本書は、熊取町教育委員会が平成６年度国庫補助事業として計画し、町史編さん室が実施した熊取町遺跡群発掘調査概要報告書である。

2．調査は、熊取町教育委員会町史編さん室　前川　淳を担当者とし、平成６年４月１日に着手し、平成７年３月31日をもって終了した。

3．本書は、報告書作成の都合上、前年度にあたる平成６年３月から平成７年２月末までの発掘調査成果を掲載することとした。

4．本書における図面の方位は、地図以外について磁北を示すこととした。

5．本書における図面の土色は、必要に応じて、小山正忠・竹原秀雄編『新版　標準土色帖』第10版（農林水産省農林技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修　1990年度版）を援用した。

6．調査および本書の作成には以下の調査員・調査補助員の参加を得た。

調　査　員　阪口　雅美・関井　澄子・永井　仁・山本　恵子

調査補助員　桑原　良治・武田　徹・田中　小夜・水葉　希・南谷　克実

吉田　知秋・和田　志穂

目　　次

はしがき

例　　言

第１章　はじめに …… 1
第２章　地理的・歴史的環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　調査の概要 …… 6
　第１節　東円寺跡の調査 …… 6
　　１．93－12区の調査 …… 7
　　２．93－13区の調査 …… 8
　　３．94－２区の調査 …… 10
　　４．94－７区の調査 …… 11
　第２節　降井家屋敷跡の調査 …… 12
　　94－１区の調査 …… 13
　第３節　久保城跡の調査 …… 14
　　１．94－１区の調査 …… 15
　第４節　大久保Ｅ遺跡の調査 …… 16
　　１．94－１区の調査 …… 17
第４章　おわりに …… 19

挿　図　目　次

第１図　熊取町の位置
第２図　熊取町内遺跡分布図
第３図　東円寺跡　調査区位置図
第４図　東円寺跡93－12区　調査区設定図
第５図　東円寺跡93－12区　調査区断面図
第６図　東円寺跡93－13区　調査区設定図
第７図　東円寺跡93－13区　調査区断面図
第８図　東円寺跡94－２区　調査区設定図
第９図　東円寺跡94－２区　調査区断面図
第10図　東円寺跡94－７区　調査区設定図
第11図　東円寺跡94－７区　調査区断面図
第12図　降井家屋敷跡94－１区　調査区位置図
第13図　降井家屋敷跡94－１区　調査区設定図
第14図　降井家屋敷跡94－１区　調査区断面図
第15図　久保城跡94－１区　調査区位置図
第16図　久保城跡94－１区　調査区設定図
第17図　久保城跡94－１区　調査区断面図
第18図　大久保Ｅ遺跡94－１区　調査区位置図
第19図　大久保Ｅ遺跡94－１区　調査区設定図
第20図　大久保Ｅ遺跡94－１区　調査区断面図

図　版　目　次

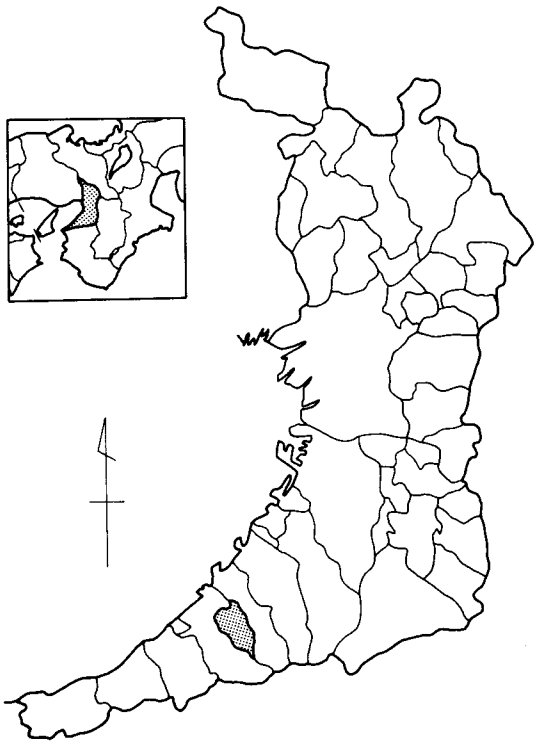
図版第一　東円寺跡93－12区
図版第二　東円寺跡93－13区
図版第三　東円寺跡94－２区
図版第四　東円寺跡94－７区
図版第五　降井家屋敷跡94－１区
図版第六　久保城跡94－１区
図版第七　大久保Ｅ遺跡94－１区

第1章　はじめに

平成6年度における文化財保護法に基づく土木工事等による埋蔵文化財の発掘調査届出件数（平成7年2月末現在）は33件であり、昨年度の同じ時期（27件）と比較して若干の増加を示している。その内訳は、ガス・上下水道・電気工事等4件、個人住宅建設8件、公共施設建設3件、店舗・事務所建設17件、その他1件となっている。また、遺跡別に見ると、東円寺跡における届出が11件、次いで大久保B遺跡、久保城跡が各4件、大谷池遺跡、城之下遺跡が各2件、中家住宅、大久保E遺跡、久保A遺跡が各1件という状況である。

以上のような状況の下で、2月末現在までに本町教育委員会では、発掘調査を16件、立会調査を2件、慎重工事7件を実施・指導している。その内訳は、発掘調査については国庫補助対象事業が5件、民間事業が11件、公共事業が1件となっており、立会調査については民間事業が2件となっている。

本書では、平成6年度国庫補助事業として実施した東円寺跡2件、降井家屋敷跡1件、久保城跡1件、大久保E遺跡1件および平成5年度事業の未報告分である東円寺跡2件（東円寺跡93－12，93－13区）を合わせた7件の発掘調査成果について概要を報告する。



第1図　熊取町の位置

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

熊取町は大阪府泉南地域のほぼ中央部に位置し、貝塚市・泉佐野市の両市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km、南北約7.8kmと、南北に長い木の葉形を呈している。町域の総面積は約17平方kmを有する（第１図）。

地形による面積比をみると、山地が41％、丘陵24％、段丘23％、低地12％に区分され、山地・丘陵部が町域総面積の約３分の２を占めている。地域別にみると、町南部においては泉南地域の基本山地となる和泉山地が大部分を占めており、北部においては和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が多くを占めている（第２図）。また、北部では狭小ながらも河川の対岸に洪積地が形成されている。

町域に水源をもつ河川は大別して見出川・雨山川・大井出川の３水系が存在している。３河川とも町南部の山間部を水源として南部から北部へ向かって流下し、泉佐野市を流下して大阪湾に注ぎ込んでいる。いずれの河川も下流部分が他市域を流れることに加えて、本町域が瀬戸内式気候区の東端に位置しているため年間降雨量が少量であることから、古くから町域一帯に多くの潅漑施設が存在している。特に現在においても町内随所で潅漑用の溜め池を目にすることができる。

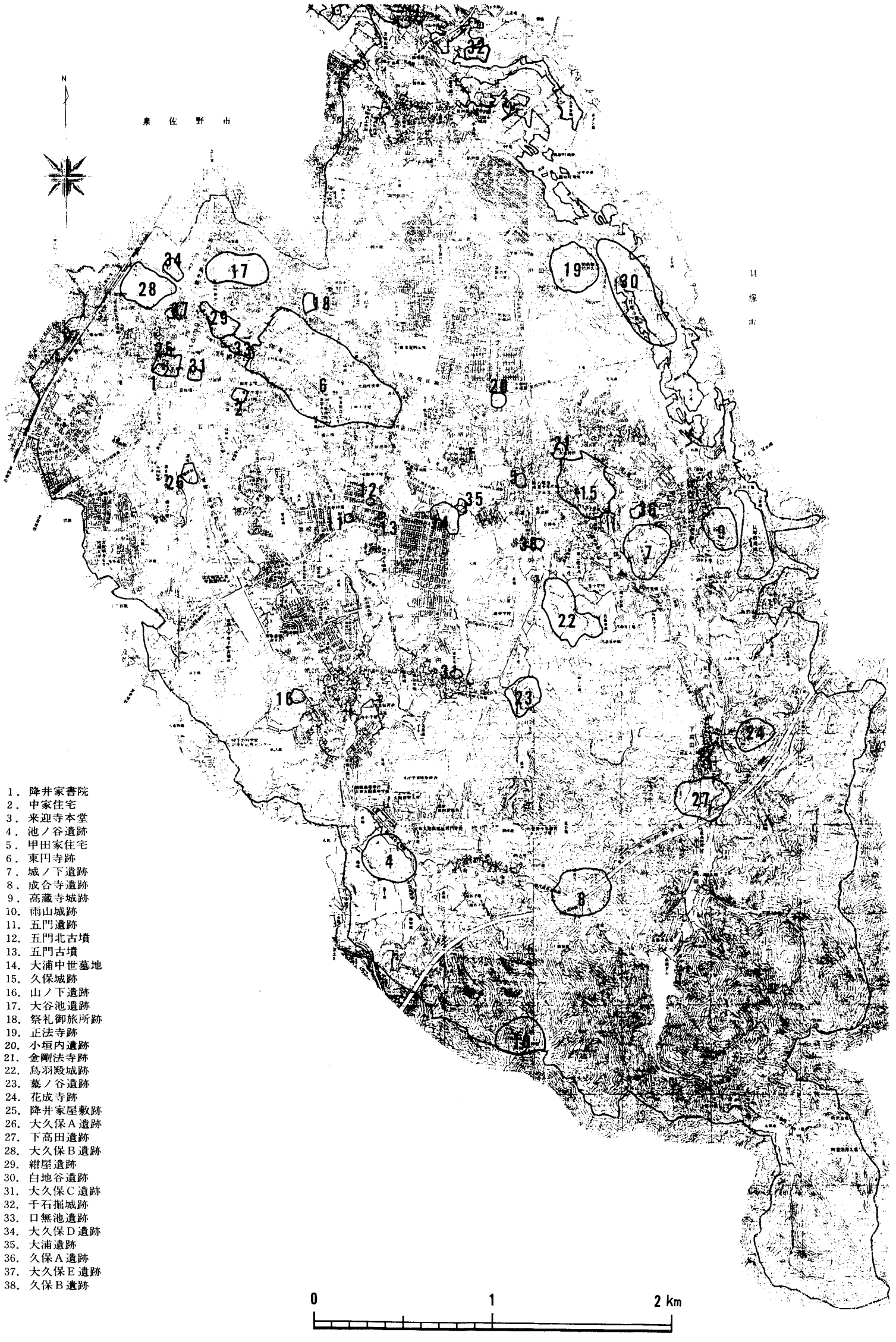
第２節　歴史的環境

本町内の遺跡数は現在38カ所を数えるが、遺跡の範囲・性格等の不明確なものが未だに多く存在しているのが現状である（第２図）。

旧石器・縄文時代については、成合寺遺跡（８）から縄文時代の石鏃・スクレイパー等の石器類が出土している。また、平成５年度の東円寺跡（６）の調査で、縄文時代早期の有舌尖頭器や前期頃の石匙・石鏃が出土しており、近辺に縄文集落の存在を窺わせるものとして注目される。

弥生時代では大久保Ｂ遺跡（28）・大久保Ｅ遺跡（37）が知られている。大久保Ｅ遺跡の調査で、終末期頃に比定される遺物が大量に投棄された溝が検出されており、今後の周辺地域の調査で当該期の集落が発見される可能性が高いといえる。他に同時代のものとしては、前述した成合寺遺跡・東円寺跡から石器が出土している。

古墳時代については五門北古墳（12）・五門古墳（13）が古墳であったとされるが現



1．降井家書院
2．中家住宅
3．来迎寺本堂
4．池ノ谷遺跡
5．甲田家住宅
6．東円寺跡
7．城ノ下遺跡
8．成合寺遺跡
9．高蔵寺城跡
10．雨山城跡
11．五門遺跡
12．五門北古墳
13．五門古墳
14．大浦中世墓地
15．久保城跡
16．山ノ下遺跡
17．大谷池遺跡
18．祭礼御旅所跡
19．正法寺跡
20．小垣内遺跡
21．金剛法寺跡
22．烏羽殿城跡
23．墓ノ谷遺跡
24．花成寺跡
25．降井家屋敷跡
26．大久保Ａ遺跡
27．下高田遺跡
28．大久保Ｂ遺跡
29．紺屋遺跡
30．白地谷遺跡
31．大久保Ｃ遺跡
32．千石掘城跡
33．口無池遺跡
34．大久保Ｄ遺跡
35．大浦遺跡
36．久保Ａ遺跡
37．大久保Ｅ遺跡
38．久保Ｂ遺跡

第２図　熊取町内遺跡分布図

在は消失しており詳細は不明である。他に同時代の遺構等は発見されておらず、本町においては不明瞭な時代である。

奈良・平安時代については、東円寺跡（6）から8世紀代の掘立柱建物群が検出されている。また、平安時代末頃には同遺跡の遺跡名でもある「東円寺」が建立されたことが出土瓦より推測されている。

中世では、前述した東円寺跡から13世紀代の掘立柱建物が現在までに10棟以上検出されており、奈良時代以降中世に至るまでこの付近一帯に村落・社寺が形成されていたことを窺い知ることができる。成合寺遺跡（8）は14世紀代を中心とする中世墓地遺跡であり、600基あまりの土壙墓群や掘立柱建物が検出されている。大浦中世墓地（14）も同じく13世紀から15世紀にかけての中世墓地遺跡であり、近年の発掘調査において当町の在銘五輪塔の中で最も古い享徳4年（1455年）銘の入った五輪塔の地輪が出土している。中世城郭については山城・平城を含めて現在6カ所の推定地を挙げているが詳細は不明である。また、5カ所ある中世寺院跡推定地についてもほとんど未調査であり今後の調査に期待がもたれる。建造物では鎌倉時代に建立されたと考えられる重要文化財の来迎寺本堂（3）が当町最古の建造物である。

近世については、重要文化財の降井家書院（1）・中家住宅（2）といった建造物や中家文書等の中近世文献史料の調査が早くから進められており、近世熊取の様相が多岐にわたり研究・解明されてきている。埋蔵文化財の側では、降井家屋敷跡（25）の調査で旧来の屋敷地を区画していたと推定される溝を検出し、中家住宅周辺地の調査では15世紀代の遺物と遺構を検出したのをはじめ、大量の江戸期の陶磁器・瓦片の出土をみている。

また本町では溜池の調査も行っており、これまで江戸期の木製の樋管を数本検出している。

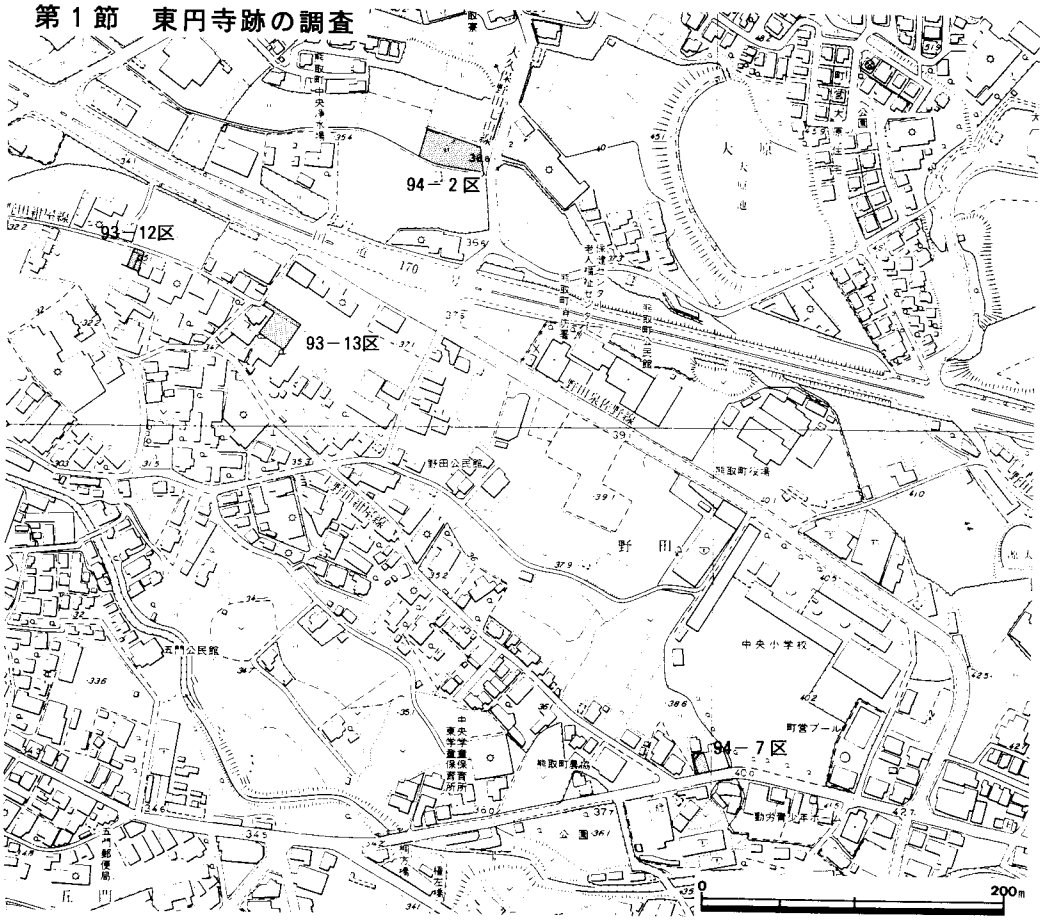
参　考　文　献

- ㈶大阪文化財センター『成合寺』(1985.3)
- 熊取町教育委員会　『熊取の歴史』(1986.11)
- 〃　『熊取町埋蔵文化財調査報告』

第1集（1986.3）～第22集（1994.3）

第3章　調査の概要

第1節　東円寺跡の調査



第3図　東円寺跡調査位置図

東円寺跡は熊取町の北東部、熊取町大字野田及び紺屋に所在し、熊取町役場・公民館の前面域を中心とする付近一帯に広がる寺院・集落遺跡である（第2図）。現在のところ東西約900m・南北約400mの町内最大の遺跡指定範囲を有する。地形的には現在の大井出川（住吉川）の右岸域に形成された低位段丘上に立地している。

遺跡名となっている「東円寺」（廃寺）は、近辺の発掘調査により出土した軒丸・軒平瓦や文献等から平安時代末頃に建立された寺院であると推定されている。当寺院は、付近の水田に伝えられている「トヨジ」「東永寺」「大門」「堂ノ後」等の小字名から、段丘面の高位置にあたる現在の熊取町役場の正面域に所在していたと考えられているが、中心部の発掘調査が行われていないため伽藍配置等の正確な把握は未だなされていない。

しかしながら、付近における近年の調査では、後世の開発行為によって遺構面が削平をうけている状況の検出例が多く、今後の調査によって東円寺自体の全容を掴

むことは、困難な状況である。寺院推定地周辺の調査の蓄積によって、寺院跡としての当遺跡の様相よりも寺院建立以前におけるこの地の様相や、建立以後に周辺に成立した13世紀から14世紀にかけての中世村落の様相が少しずつ明らかになりつつある。

現在のところ当遺跡において人間の営みを知ることのできる最古の時代としては縄文時代早期にまで遡ることができる。平成5年度に行った熊取町立中央小学校内の発掘調査において、縄文時代早期の有舌尖頭器や前期の石匙・石鏃等が出土しており、このことは、当時この付近一帯が縄文人の狩場として存在した可能性を示唆している。

当地周辺において確実な生活関連の遺構が検出されるようになるのは奈良時代（8世紀）以降である。「東円寺」推定地の西側近接地の発掘調査において、8世紀代に比定される遺物や掘立柱建物群が検出されている(1)。また、包含層内には広く奈良期の遺物が混入することからみて、少なくとも奈良時代には同地周辺の段丘上位面における土地利用・開発が進み始めていたことを裏付けている。

中世（主に13世紀～14世紀）になると寺院推定地を中心として遺構・遺物の検出量が飛躍的に多くなり、段丘面上の利用・開発が広範囲に行われたことを知ることができる。とりわけ寺院西側及び東南側段丘面付近一帯の開発が著しく、既往の発掘調査において計10棟以上の掘立柱建物を検出している。特に、1988年度に行った遺跡東端付近の発掘調査において同時期の鍛治に関連する遺構を検出しており(2)、遺跡の東方への広がりを示唆している。また、平成5年度の中央小学校発掘調査では自然地形を利用した中世水田跡が検出されている。

近世における当地周辺は「東円寺」の衰退とともに一律に整地を受け水田化されたことが既往の調査からある程度判明している。「東円寺」の衰退については秀吉の根来寺遠征の際に焼亡し衰退したと言い伝えられているが、その是非についての物証的裏付けは現在のところなされてはいない。

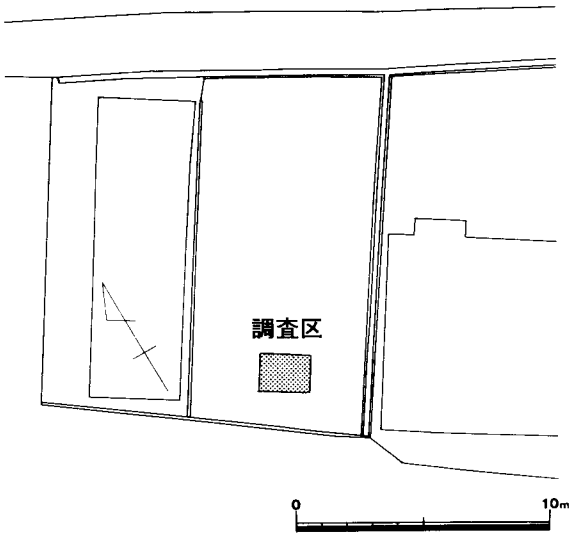
東円寺跡93－12区

調査地点は、熊取町役場より西南西約400m、大阪外環状線より20m程南へ入った紺屋の集落の一角である。南の住吉川に向って徐々に傾斜する段丘上にあって、近世より水田開発が行われてきた地域である。（第3図）

本件は個人住宅の建て替え工事に伴うものであり、平成6年2月9日に届出を受けた。

申請地番は熊取町大字紺屋255-6番地、申請面積は103㎡である。

調査は旧宅が撤去された後、便槽にあたる南側部分に調査区（2×1.5ｍ）を設定し、平成６年３月２日と３日の２日間、人力掘削で行った。（第４図）



第４図　東円寺跡93－12区　調査区設定図

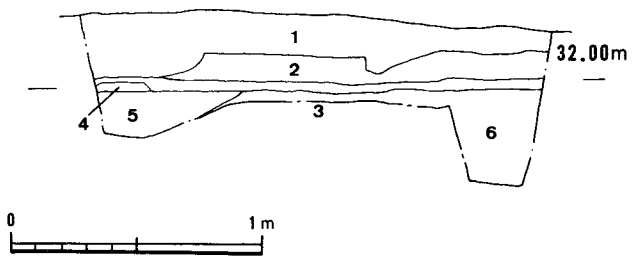
基本層序は上から順に、宅地造成に関係する整地層（第１層）、耕作開発層（第２、第３、第４層）があり、その直下の黄褐色砂質土層（第５、第６層）が自然堆積層（地山）である。（第５図）

遺構・遺物は一切認められなかった。

その特徴から近世以後のものと思える耕作土層が地山面を削平している状況が窺われることによって、近世以前に存在していた土層は失われていると思える。

また調査区内の僅かの落込み状の部分にみられる黄褐色砂質土（第５層）が自然堆積土層であること等を考えあわせると、この地点が近世以前に開かれていた可能性は少ないと思える。

また平成５年５月には、今回の調査地点の即西隣でも、個人住宅建設に伴う調査を行い、今回の調査結果とほぼ一致する結果を得ている[3]。



第５図　東円寺跡93－12区　調査区断面図

東円寺跡93－13区

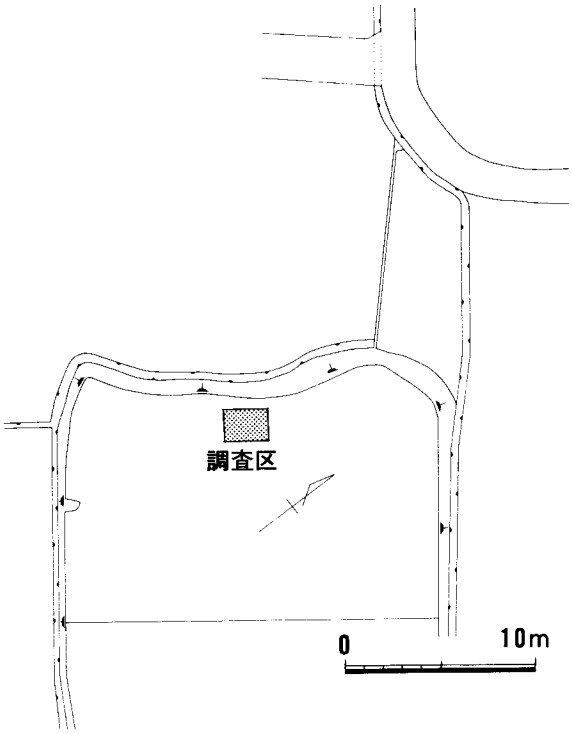
前記の東円寺跡93－12区の調査地点から南東へ僅か35ｍの地点にあたり、ほぼ同様の位置環境を呈している。（第３図）

本件は個人住宅の新築工事に伴うものであり、届出は平成６年２月22日、申請地番は

熊取町大字野田2434-2と2831番地、申請面積は390.47㎡である。

旧宅撤去の後、中央東端部に調査区（2×1.4m）を設定して、平成6年3月14日と15日の2日間人力掘削による調査を行った。（第6図）

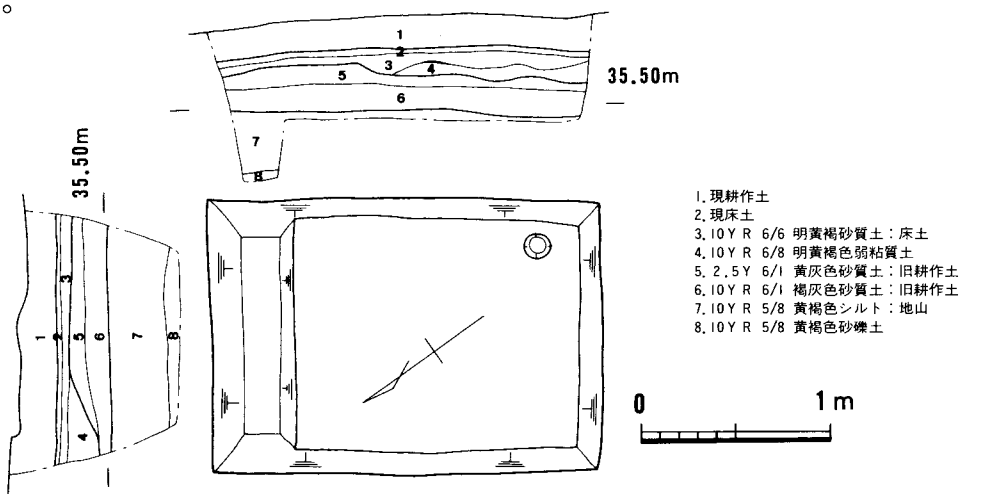
基本層序は上から、耕作開発に伴う層が3層（第1～3層）、以下に明黄褐色弱粘質土層（第4層）、黄灰色砂質土層（第5層）、褐灰色砂質土層（第6層）があって、黄褐色シルト層（第7層）以下黄褐色砂礫土層（第8層）が自然層（地山）と思われた。第5、第6層はその特徴から中世頃の耕作開発に伴う土層と思われる。（第7図）



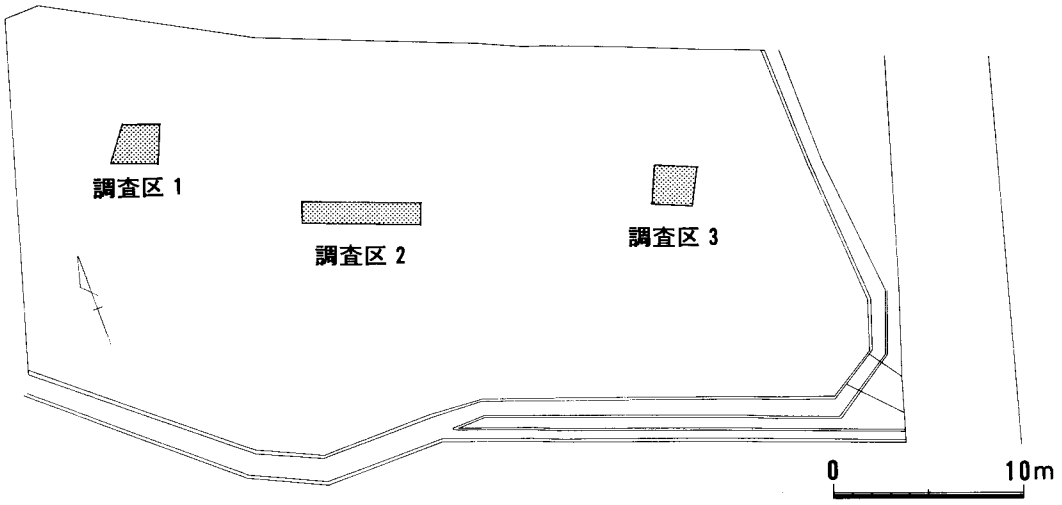
第6図　東円寺跡93－13区 調査区設定図

遺物は検出しなかったが、調査区南角に直径約14cm、深さ約20cmのピットを1ヶ検出した。埋土は暗褐色のシルトで、特徴から柱穴と思われる。

尚、今回の工事によって、第4層以下に影響が及ばないことを確認した上で調査を終了した。



第7図　東円寺跡93－13区 平面、断面図



第８図　東円寺跡94－２区 調査区設定図

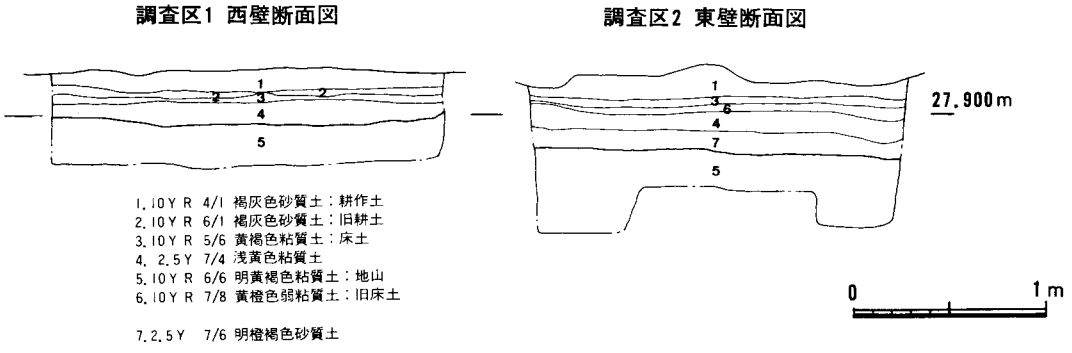
東円寺跡94－２区

本調査地点付近は熊取町役場から北西約60ｍ付近にあり、古くから田園地帯であったが、大阪外環状線の新線整備とともに沿線は建造物が多くなってきた。大阪外環状線の北側に当るこの付近は南側よりも一段と低位にあり、周囲の調査では砂質の自然堆積層が観察されている。（第３図）

本件は個人住宅の建て替え工事に伴うものであり、平成６年４月20日に届出を受けた。申請地番は熊取町大字野田2444番地、申請面積は796㎡である。

調査は最も道路に近い東側に調査区１（2×2ｍ）、それとは正反対側の西側に調査区２（2×2ｍ）、この両調査区間に細長く調査区３（6×1.5ｍ）を設定して、平成６年６月27日より29日までの３日間、人力掘削による調査を実施した。（第８図）

基本層序は上から、耕作土（第１層）、旧耕作土（第２層）、床土（第３層）、浅黄色の粘質土（第４層）、明黄褐色粘質土（第５層）、砂礫（第11層）が基本となる。第



第９図　東円寺跡94－２区 調査区１・２・３ 断面図

4層の浅黄色粘質土は整地にともなう土層と思われるが遺物等は全く包含しておらず、以下の明黄褐色粘質土層（第5層）が地山と思われる。その他中央部分の調査区3付近では、第4層と第5層の中間に黄褐色系の粘質土及び砂層が数層見られるが、これは状況から中近世以降の耕作に関係するものと思われ、遺物等が検出される可能性は極めて低い状況であった。（第9図）

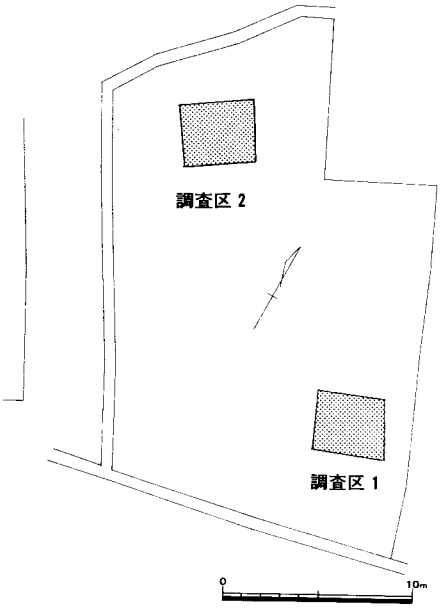
遺構・遺物は一切検出できなかった。

東円寺跡94－7区

本調査地は国道170号に面して熊取町立中央小学校の西隣に位置している。地形的には、およそ30m南に大井出川が流下する低位段丘上に位置している。（第3図）

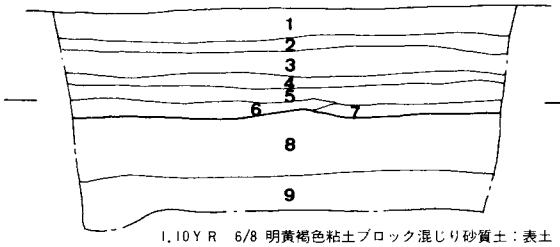
本件は個人住宅の建て替え工事に伴うものであり、平成6年8月26日に届出を受けた。申請地番は熊取町大字野田2220-3番地の一部で、申請面積は88.93㎡である。

調査は既存建造物の撤去後、工事に先立って調査地中央西寄りに調査区1（1.5×2m）、中央東寄りに調査区2（1.5×2m）を設定して、平成7年1月17日から1月19日までの3日間、人力掘削による調査を実施した。（第10図）

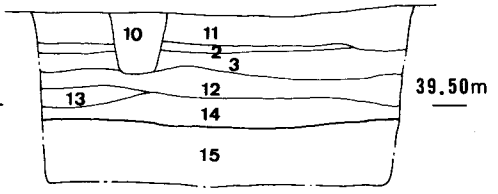


第10図
東円寺跡94－7区 調査区設定図

調査区1 北壁断面図



調査区2 西壁断面図



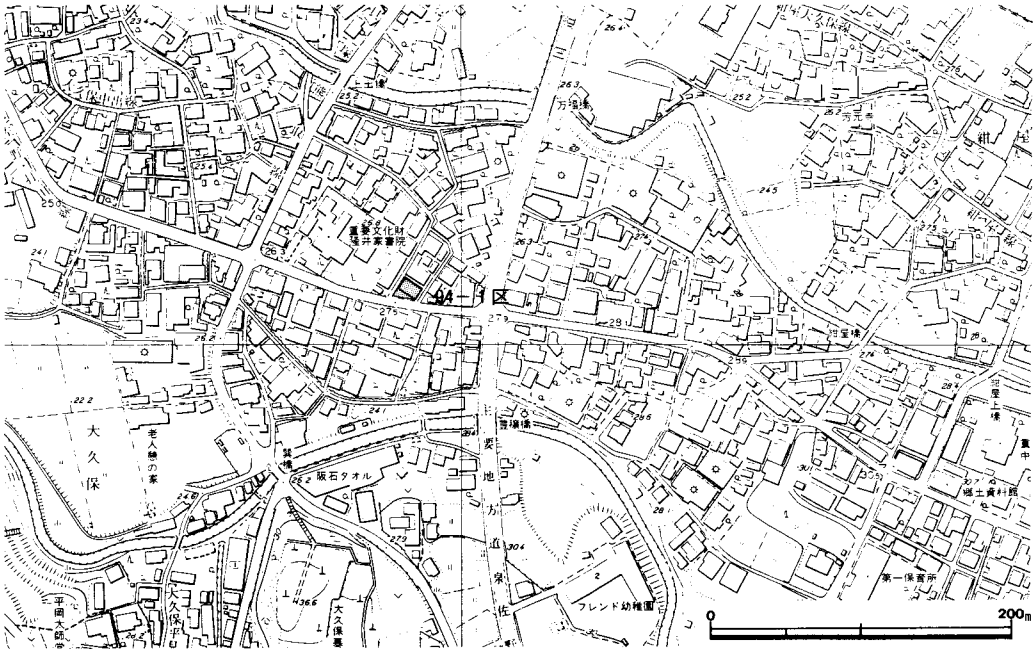
1. 10YR 6/8 明黄褐色粘土ブロック混じり砂質土：表土
2. 10YR 7/1 灰白色砂質土：旧耕土
3. 10YR 6/8 明黄褐色砂質土：旧床土
4. 10YR 6/6 明黄褐色砂質土：旧耕土系
5. 7.5YR 6/6 橙色砂質土：4の床土及び旧耕土
6. 7.5YR 5/8 明褐色砂質土：5の床土系
7. 7.5YR 5/8 明褐色粘質土
8. 10YR 4/6 褐色砂質土：地山
9. 10YR 6/6 明黄褐色粘質土：地山粘土
10. 10YR 6/2 灰黄褐色砂質土：近年の痕跡1と2と3を含んでいる
11. 10YR 5/1 褐灰色砂質土：耕土2を含んだ地表土整地土
12. 10YR 6/3 にぶい黄橙色砂質土：整地土(旧耕土を含んでいる)
13. 10YR 6/2 灰黄褐色砂質土：整地土
14. 10YR 6/6 明黄褐色砂質土：床土を含んでいる
15. 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂質土：粗粒砂とマンガン斑

第11図　東円寺跡94－7区 調査区1・2 断面図

0　1m

基本層序は調査区１では上から整地土（第１層）、旧耕作土（第２層）、床土（第３層）、その下に耕作土・床土を含んだ整地土（第４～７層）、褐色砂質土（第８層）、明黄褐色粘質土（第９層）となっており、第８層以下は地山と観察できる。調査区２も同様であるが、近年の攪乱があり、地山はにぶい黄褐色砂質土（第７層）であり、上面は削平されている。したがって、いわゆる包含層や生活面はなく遺構・遺物は一切検出されなかった。（第11図）

第２節　降井家屋敷跡の調査



第12図　降井家屋敷跡 調査区位置図

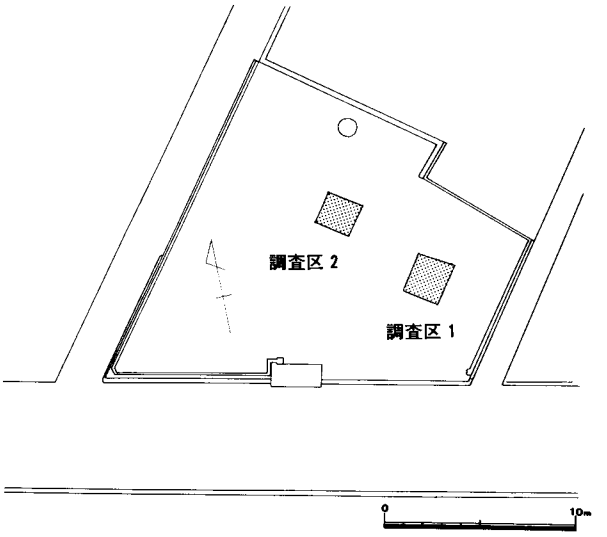
地理的には、ＪＲ熊取駅から南東へおよそ500m付近にあって、住吉川（大井出川と和田川が合流したもの）と雨山川に挟まれている。これよりやや南へ上れば同様の環境下に重要文化財中家住宅もあり、このような地形的な側面は注目される。

降井家屋敷跡は江戸時代初期の特色を有する降井家書院（昭和27年重要文化財指定）を中心におよそ150m四方の範囲が含まれており、86年と87年の調査の際には、屋敷地を区画すると思われる溝や近世陶磁器片等も多く出土している。

降井家は中家とともに当地方の豪族であったと伝えられ、江戸時代を通して大いに栄

え現在に至る旧家である。

昭和27年３月重要文化財に指定された書院は、江戸時代初期頃の数寄屋風を多分に加味した書院造りであり、江戸時代豪族の生活の一端を窺うことのできる書院造りの標本といわれている。建物は８畳の上段の間と12畳の次の間で、三方に畳敷の入側があり、さらに縁側を配している。建立以来の修理は明らかではないが、柱・縁廻り・屋根等は数度の修理を経ているものと思われる。

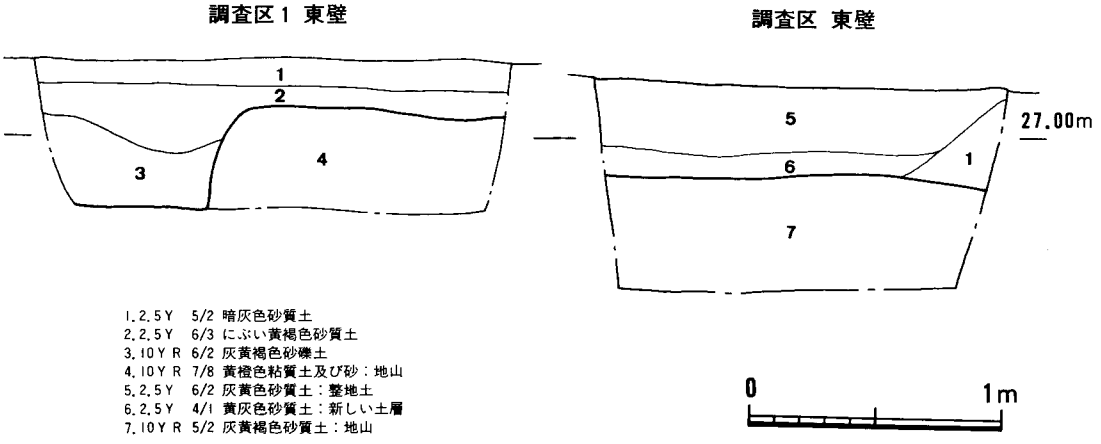


第13図　降井家屋敷跡94－１区　調査区位置図

１．降井家屋敷跡94－１区

本調査地点は熊取町大字大久保20-１番地、150ｍ四方の範囲を有する降井家屋敷跡の中央部南端に位置しており、申請面積は213.91㎡である。平成６年４月25日に届出を受け、平成６年５月23日よりの２日間調査を行った。（第12図）

旧国道170号線に面している東側に調査区１（2×2ｍ）、中央付近に調査区２（2×1.5ｍ）を設定して、人力掘削による調査を行った。（第13図）

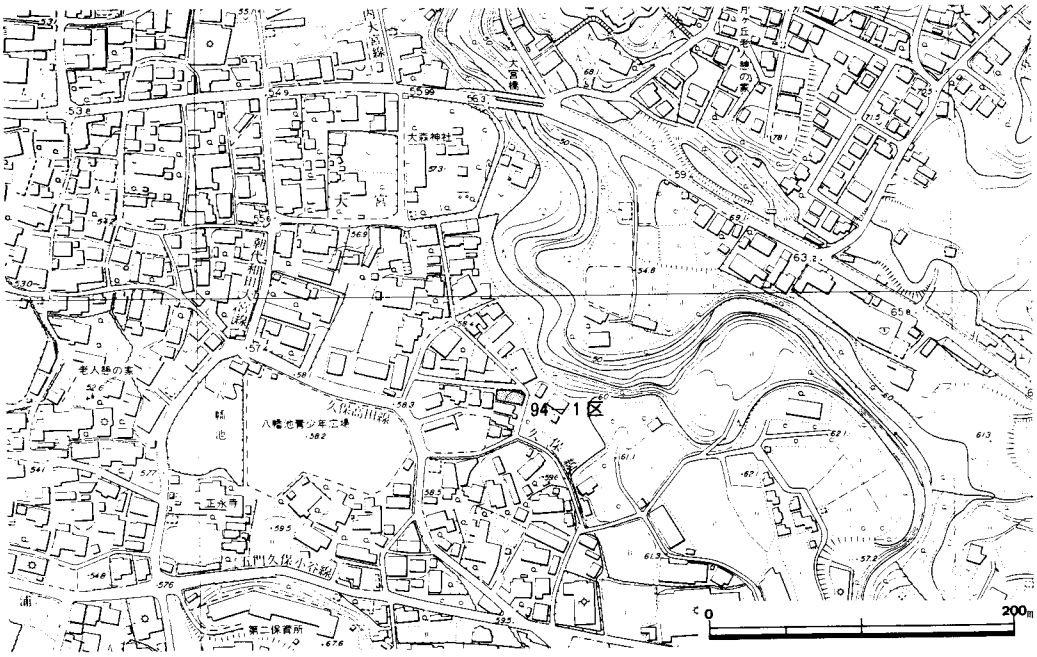


第14図　降井家屋敷跡94－１区　調査区１・２　断面図

二つの調査区において基本層序にはかなりの相違が認められるが、両方で開発に伴う整地土層が地山面を直接攪乱削平している様子が観察され、成果には乏しいものといわざるをえない。その他に一カ所のトレンチを試みたがやはり攪乱が深くまで及んでいる状況をみた。（第14図）

遺物として近世の陶磁器と瓦片を数片検出したが、いずれも表採と近代における整地攪乱層中からのものに限られる。

第３節　久保城跡の調査



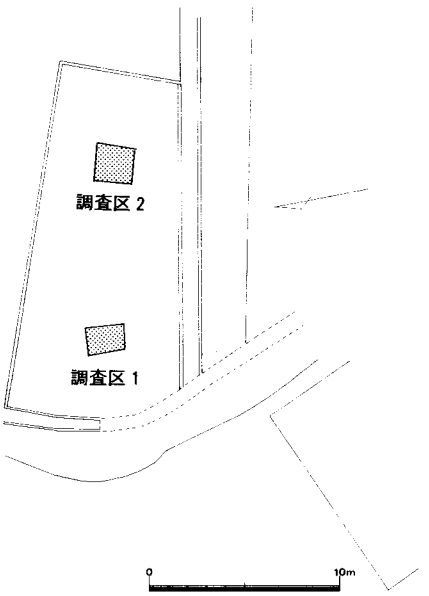
第15図　久保城跡 調査区位置図

久保城跡は、熊取町の中央やや北東よりの熊取町大字久保にあって約９万㎡の範囲を有している。平安期半ばに編纂されたとされる「和泉国々内神名帳」に名の出てくる大森神社の南側一帯に広がる段丘面に位置している。現在、見出川の左岸域一帯を中心とした地域に、「矢ノ倉」「的場」「土居ノ内」「中堀」「荒堀」等の城郭に関連する小字名が集中して存在することから、この地に城郭の存在したことが推定されている。かつてこの範囲内において多量の瓦や、瓦器、瓦質土器等が出土したといわれている。しかし今日まで小規模な発掘調査を数カ所行っているだけにすぎず、城郭に直接関連する遺構等は未だ検出されていない。

またこの推定地点よりも南東へ約500ｍ程下がった見出川右岸にあって、小谷穴釜線

を中心とする城ノ下遺跡の範囲内にも「城ノ下」「岡殿」等の小字名がみられるなど、久保地域における城郭等の輪郭は定かではない。

上記の両地域の中間付近に位置する熊取町大字久保1728番地における平成５年の調査では、城館に関する可能性のある夥しい数の中世の土器類と建物跡を検出している。



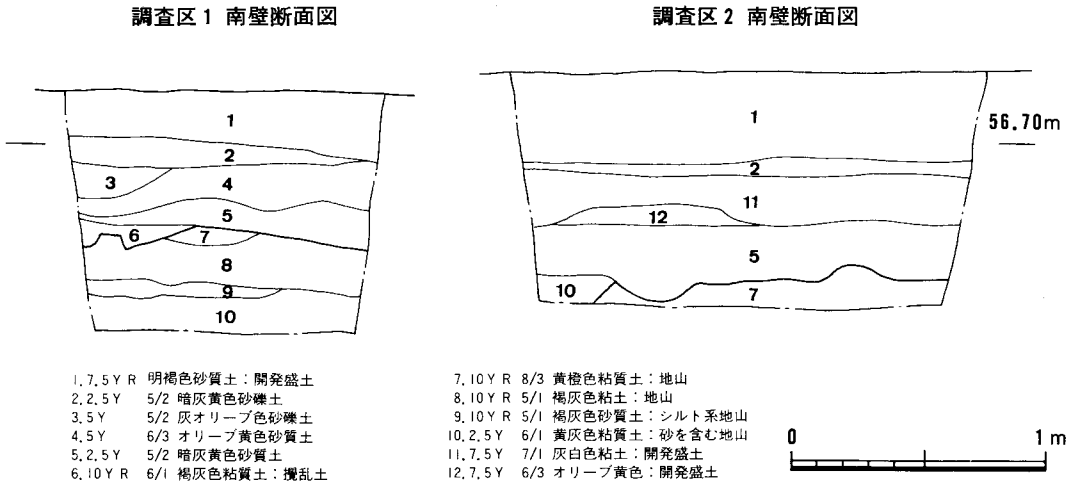
第16図
久保城跡94－１区 調査区設定図

１．久保城跡94－１区

調査地点は、熊取町役場から西南西約1.2km付近に位置し、大森神社の南、見出川左岸上にある。一帯は割合と古くから集落が営まれている様子で、近年個人住宅の建て替えが頻繁に行われている。（第15図）

本件は個人住宅の建て替え工事に伴うものであり、平成６年８月１日に届出を受けた。申請地番は、熊取町大字久保1572－9番地、申請面積は141.75㎡である。

調査は南北にやや細長い対象地に対して北側に調査区１（1.5×2m）、南側に調査区２（2×2m）を設定して、平成６年８月18日より８月20日までの３日間に渡って、人力



第17図　久保城跡94－１区 調査区１・２ 断面図

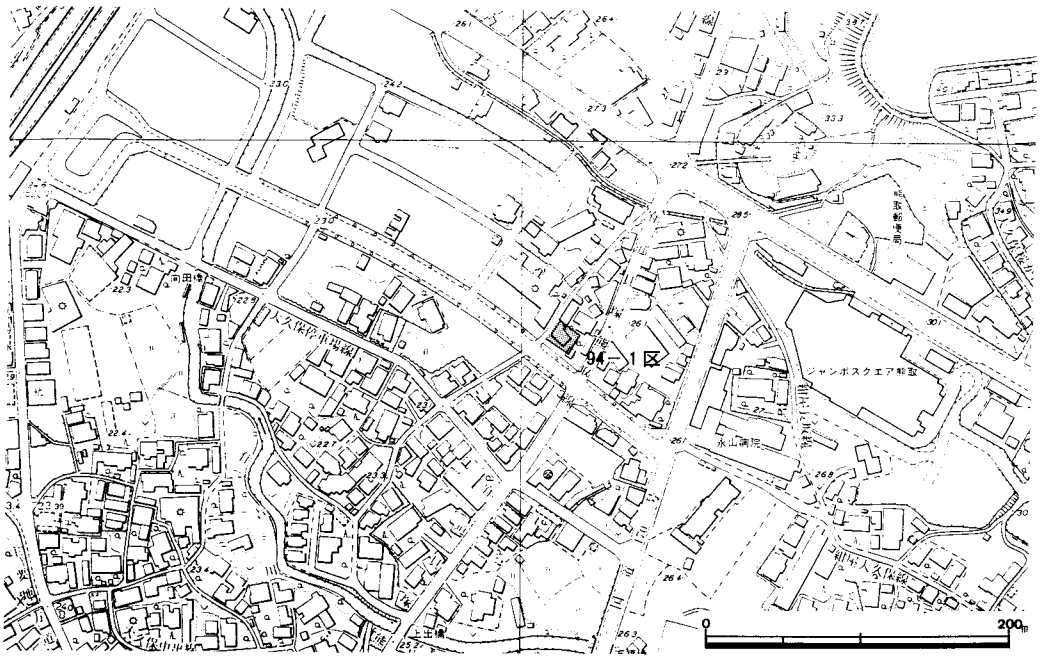
掘削による調査を実施した。（第16図）

基本層序は、旧宅地の造成・解体に伴う分厚い土層（第１～６層）と、その下に浅黄色粘土層（第７層）以下の地山が存在しており、近年の開発が地山面に及んでいる様子が観察される。（第17図）

この様な状況下、いわゆる包含層と生活面における遺構といったものを当地で検出することは極めて困難と思われ、また調査の結果、出土遺物の類は一切認められなかった。

昨年度の二件の調査に続き、今回も何ら城郭等に関係する部分に触れることは無かった。

第４節　大久保Ｅ遺跡の調査



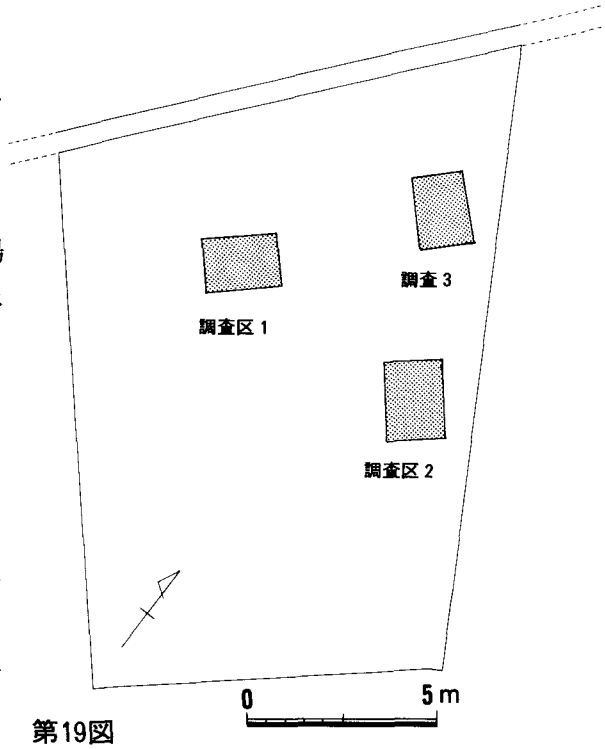
第18図　大久保Ｅ遺跡 調査区位置図

大久保Ｅ遺跡はＪＲ熊取駅の東300ｍ付近にあり、50ｍ四方の範囲をもつ。

平成元年、２年の調査の際には、自然流路内より弥生時代から古墳時代にかけての時期を示すと思われる数多くの甕・高杯・製塩土器等が検出されたが、これが熊取町内で最大級の発掘成果となっている。これは深さ約1.5ｍ以下からの検出例であり、以来付

近においては大規模な開発例がなく、連続するような成果は報告されていない。今後に期待するところである。

また付近は中世より盛んに開発されていった場所でもあり、中世を示す土器を含んだ包含層も多くみられる。旧粉河街道が範囲内を通っており、その側面からの追究もなされるべきであろう。

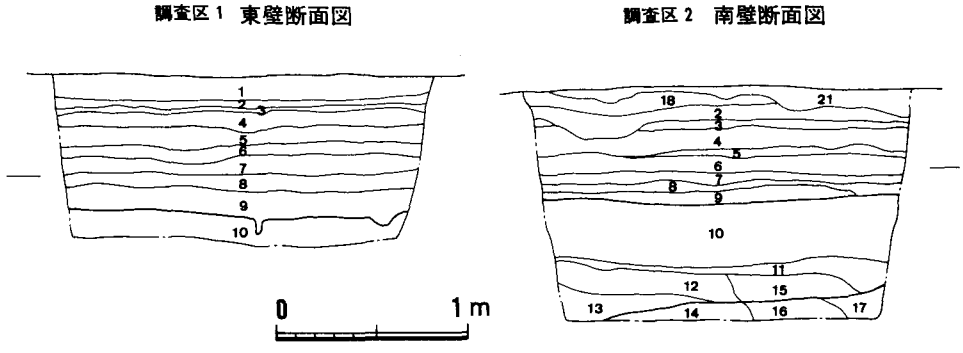


第19図
大久保E遺跡94－1区 調査区設定図

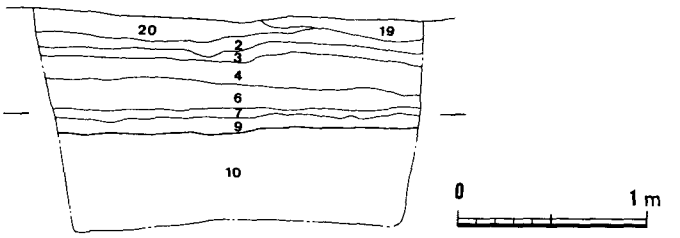
1．大久保E遺跡94－1区

調査地点は、ＪＲ熊取駅から東南方向に約140m、大阪外環状線、大久保西交差点から南へ約50ｍに下った付近に位置する。また約80ｍ南には蛇行する住吉川があり、その右岸部上の地点ともいえる。この辺りは近年、ＪＲ熊取駅前の整備事業が行われて旧態は一変し、広々とした道路と駐輪場が拡がる殺風景な空間となっている。（第18図）

本件は個人住宅の建て替え工事に伴うものであり、平成６年12月15日に届出を受けた。



第20図　大久保遺跡94－1区 調査区1・2 断面図



第21図　大久保Ｅ遺跡94－１　調査区３　東壁　断面図

申請地番は熊取町大字大久保458－３番地、申請面積は290.83㎡、旧宅撤去の後調査を行った。

調査は平成７年１月23日より１月30日までの間の４日間、人力掘削によって実施した。建物予定部分に調査区１（2×2m）、建物の建たない部分に調査区２（2.5×1.5m）と調査区３（1.5×2.0m）を設定し、既往の調査の結果を踏まえて、この二カ所は約1.5mの深度まで掘削して観察した。（第19図）

基本層序は、３つの調査区ともほぼ一致しており、上から旧宅造成時の盛土（第１層）旧耕作土が２層（第２層～第３層）、第４層から第６層が中世の可能性のある耕作時の整地土の連続、第７層から地山と思わしき黄褐色粘質土（第10層）までは確実に中世の耕作に伴う整地土層の重なりである。（第20図）

第７層～第９層からは若干であるが瓦器や土師器の小片を検出している。また調査区２では先の黄褐色粘土層の下より、自然流路と思わしき溝ＳＲ０１を検出し、埋土より土師質の土器細片を一片検出した。

第4章　おわりに

東円寺跡、降井家敷跡、久保城跡、大久保E遺跡の4遺跡における計7件の国庫補助対策事業に伴う発掘調査結果の概要を説明した。

東円寺跡に関しては、今年度の国庫補助対策事業に伴う発掘調査成果では、見るべきものはなかった。しかし熊取中央小学校内の公共工事に伴う今年度94－1区の大規模な調査では、東円寺になんらかの関係があると思われる建物の痕跡が確認されている。調査が進んでいくにつれ、近年の開発行為によって重要な埋蔵文化財が削平されてしまっている事実の検出例も多くみられ、今後のさらなる発掘調査によっても、東円寺自体の痕跡を明らかにすることが厳しい状況である。

降井家屋敷跡の調査では、以前の成果には及ばないもののいずれも近世以後の陶磁器片を採取し、同遺跡の年代観に若干の成果を挙げたと思っている。

残念ながら久保城跡の調査は、開発行為によると思われる既成の攪乱によって何も成果は得られなかった。

大久保E遺跡に関しては、今回の調査が、個人住宅の建築によるものという性格上、その規模も必然的に制限するべきものであった為、平成元年～2年の公共事業の中で行われた大規模な調査によって得られた様な、弥生終末期付近の遺物等に連鎖する成果を得ることはなかった。但し今回は、この地における開発が瓦器を伴う時期に開始されたことを物語る、中世の分厚い包含層を検出し、古代以前の遺跡ばかりが注目される熊取駅周辺の大久保遺跡での調査の方法にも、新たな検討を加えさせるものがあったと思う。

埋蔵文化財調査の方法と埋蔵文化財保存の意味を常に念頭に掲げ、可能な限り最善の調査を継続していく所存である。

註

(1)　熊取町教育委員会「熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅱ」(1988.3)

(2)　熊取町教育委員会「東円寺跡発掘調査概要・Ⅲ」(1989.3)

(3)　熊取町委員会「熊取町遺跡群発掘調査概委報告書・Ⅷ」(1994.3) P.10

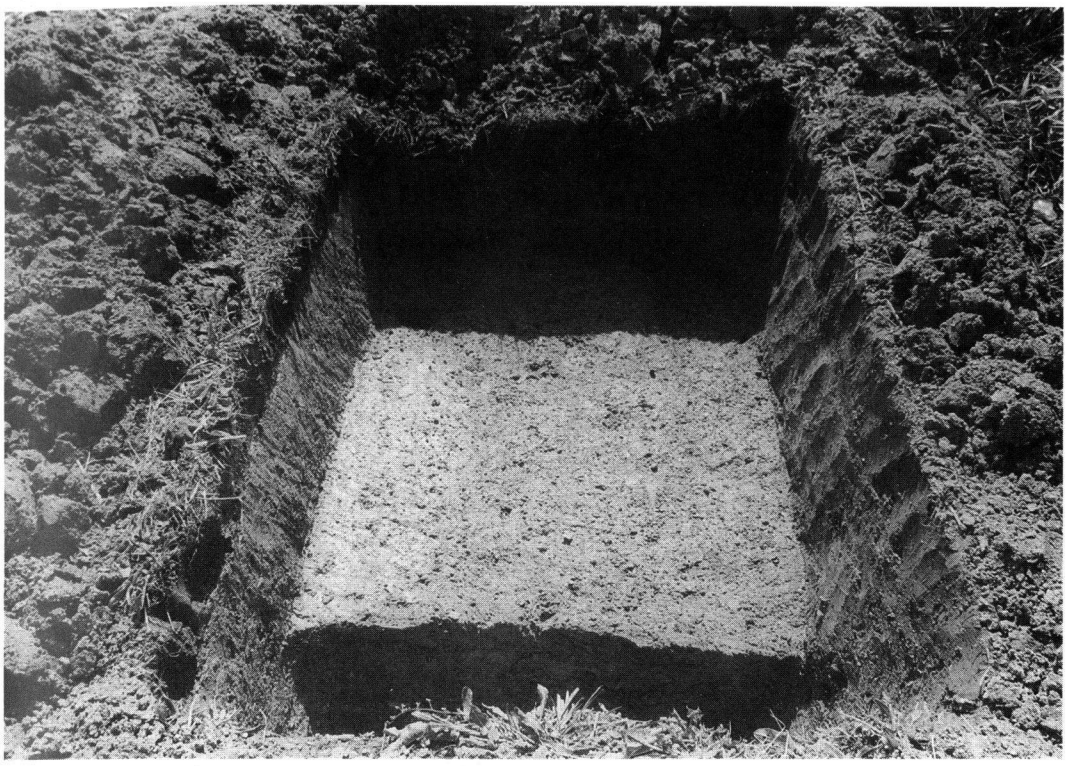
図　　版

図版第一　東円寺跡93－12区

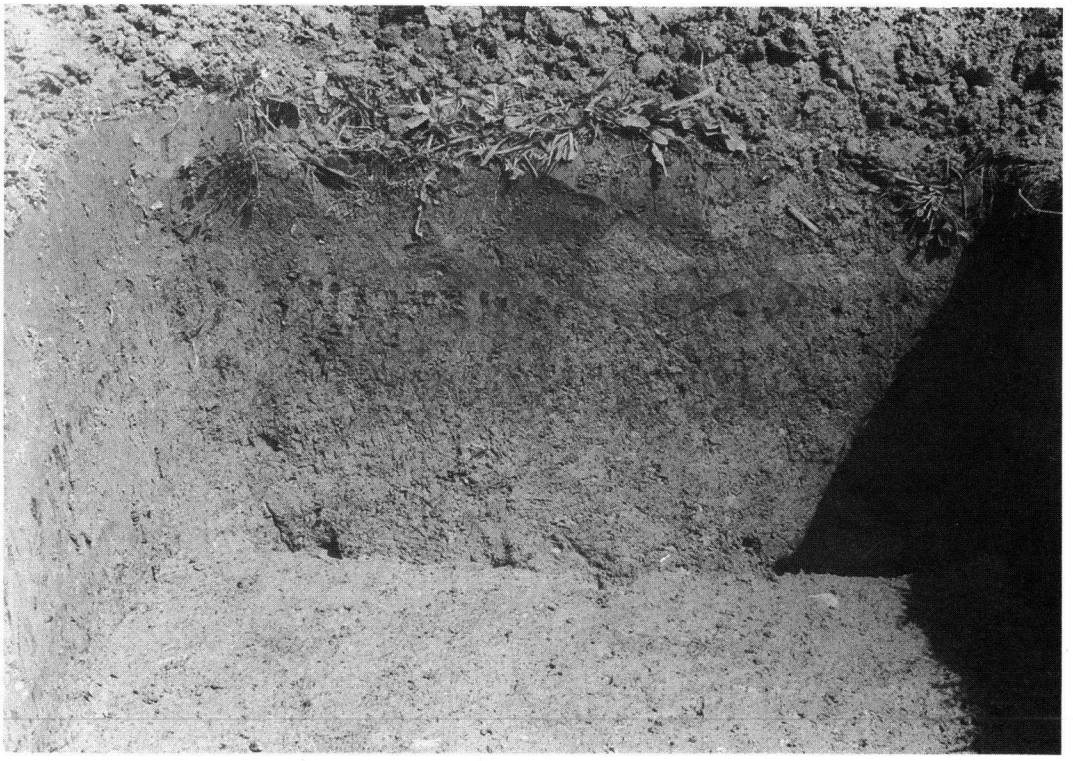
全景（南より）

北壁（西側部分）

図版第二　東円寺跡93－13区

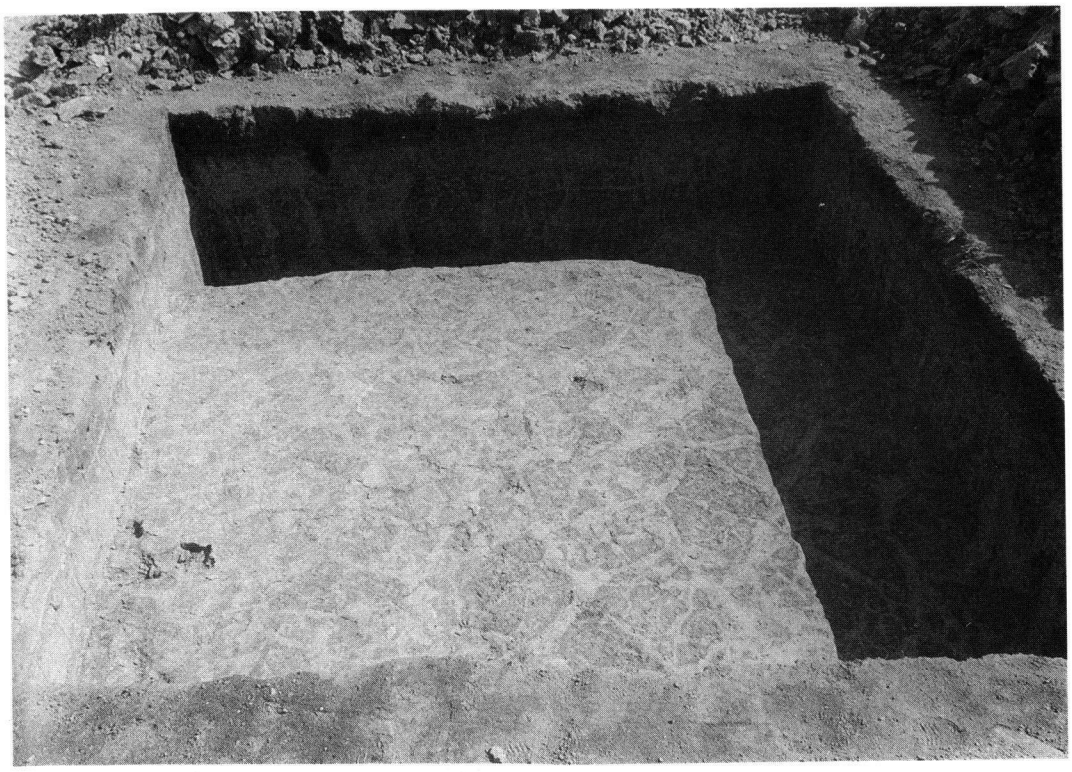


全景（北より）



北壁

図版第三　東円寺跡94－2区



調査区1　全景（北より）

調査区2　全景（南より）

図版第四　東円寺跡94－7区

調査区1　全景（南より）

調査区2　全景（東より）

図版第五　降井家屋敷跡94－1区

調査区１　全景（南より）

調査区２　全景（東より）

図版第六　久保城跡94－1区

調査区1　全景（北より）

調査区2　全景（北より）

図版第七　大久保E94－1区

調査区3　南壁

図版　大久保E94－1区

調査区2　東壁

報告書抄録

ふりがな	くまとりちょういせきぐんはっくつちょうさ ほうこく
書名	熊取町遺跡群発掘調査概要報告
副書名	
巻次	Ⅸ
シリーズ名	熊取町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第２３集
編著者名	前川　淳
編集機関	熊取町教育委員会
所在地	〒590-04　大阪府泉南郡熊取町大字野田２２４４　℡ ０７２４－５２－１００１
発行年月日	西暦　１９９５年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
とうえんじあと 東円寺跡	おおさかふ せんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうおおあざこんや 熊取町大字紺屋		6	34 24 02	135 21 16	93-12区 19940302~ 19940303	3㎡	
	おおさかふ せんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうおおあざのだ 熊取町大字野田			34 24 04	135 21 18	93-13区 19940314~ 19940315	2．8㎡	
	おおさかふ せんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうおおあざのだ 熊取町大字野田			34 24 06	135 21 15	94-2区 19940627~ 19940629	１７㎡	
	おおさかふ せんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうおおあざのだ 熊取町大字野田			34 23 47	135 21 52	94-7区 19950117~ 19950119	6㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東円寺跡	集落遺跡 寺院跡	なし	なし	なし	縄文時代から近世までの複合遺跡

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ふるいけやしきあと 降井家屋敷跡	おおさかふ せんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうおおあざおおくぼ 熊取町大字大久保		25	34 23 55	135 20 47	94-1区 19940506~ 19940511	8㎡	
くぼじょうあと 久保城跡	おおさかふ せんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうおおあざおおくぼ 熊取町大字大久保		15	34 23 36	135 22 17	94-1区 19940818~ 19940820	7㎡	
おおくぼいせき 大久保E遺跡	おおさかふ せんなんぐん 大阪府泉南郡 くまとりちょうおおあざおおくぼ 熊取町大字大久保		37	34 24 04	135 20 50	94-1区 19950124~ 19950130	9㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
降井家屋敷跡	屋敷跡	なし	なし	なし	
久保城跡	城郭跡	なし	なし	なし	
大久保E遺跡	集落跡	弥生～江戸	なし	瓦器、土師器等、小破片	平成元・2年の調査時にGL下－20mで自然流路内より200点をこえる庄内期の土師器を検出

熊取町埋蔵文化財調査報告　第23集
熊取町遺跡群発掘調査概要報告書・Ⅸ
平成７年３月・発行
発行・編集　熊取町教育委員会
大阪府貝塚市近木1483の８番地
印刷　山村印刷